

初

めは、ダイコンを二列だけ播くという話だった。

「しょっちゅう来れんのだけん、ほつといてもできるもんを作りやあいわね。」

それぐらいなら家庭菜園入門として適当だろう。

やってみて物足りなければ増やしていけばいい。そう考えて始めたのだが、

「ここで、ニンジン作らん？する？だったら、ここに一畝作って。」

「うちのニンニクが余ったけん、こつちに植えーか。」

「ハクサイとキャベツの苗があつたけん、植えちよういたけんね。もう少し場所があーけん、苗買ってきて植えーだわね。そうねえ、ブロッコリーもあーといけん、三つずつでも買ってーだわ。あつ、ついでに鶏糞と牛糞買って来ちよいてよ。」

行く度にMさんの勧めに従っていたら、あつという間にけっこうな規模の菜園になった。こんなに維持できるのだろうか？と少々不安になったが、Mさんとしやべつていると、だれの畑でだれの作物で、といったことは関係なさそうなので、言われるまま成り行きに任せればよいと思えてくる。

八月の終わりにダイコンの種を播いた。その種もM

さんが播いた残りももらったものだ。その翌日から天気が崩れてどっきりと雨が降り、その後好天が続いた。どうやら最高のタイミングでの種まきであつたらしく、びつくりするようなスピードで葉が大きくなっていた。

「ちよつと、うちの周りでこげん大きく育つちようのないよ。よかつたねえ。」

Mさん、実に楽しそうだ。十月の終わりごろには収穫できるんじゃないかということだった。

「あんたんとこのやつから取って食べーわ。」

もちろん異存はない。ぼくは、言われるままにわずかに作業しただけで、畑地はもとより種も肥料も農薬もすべてMさんのものなのだから。

「この畑にあるもんは、どれなと取っていいけんね。好きなやつ持つて帰ーない。」

つまり、Mさんは肥沃な畑地が何も生み出さず雑草がはびこつてしまふのが我慢ならないのだ。出会つて楽しくおしゃべりができる間柄だつたら誰が何を作つてもよく、誰が何を持つて行つてもかまわない。

「そこ、ひょうたんカボチャがあーでしょ。尻が少し赤なつたら取れーけんね。おいしいよ。まあ、他の人が先に取つたらないけど。」

原始共産制つてこんな感じかなあと想像した。

専業ババ奮闘記 (その2) 116

木幡智恵美

秋 (5)

寛大が紙粘土でトリケラトプス、私がお婆さんを作つてから後の土曜日は、二週とも娘が休みで、私が玉湯に行つたり、娘が子どもたちを連れて来たり。

玉湯の家に行くと、天気が良ければ大概近くの公園に行く。公会堂の横に広場があり、鉄棒や雲梯、ブランコにジャングルジム、滑り台が備わつて居るのだ。寛大はもつぱら虫捕りで、実歩はお母さんとケンパをしたり、鉄棒をしたり。私は宗矢について回る。滑り台の降り口から二メートルくらいのところに乗せて滑らせる。と、またしてくれと両手を広げて催促するので、何度か繰り返す。あとは、石を拾つたり、膝の上に乗せてブランコをしたり。最近言葉が出だし、マンマ、ブーのほかに、寛大が追つて居る蝶が逃げていくと、「つちやつた」とも言う。外でしつかり遊んだ後、家に帰つて昼食を摂ると、宗矢ときたら、目を閉じながら口を動かして続け、椅子に座つてスプーンを手にしたまま眠つてしまつた。宗矢が眠つた後は、寛大、実歩、お母ちゃんと私とで、お決まりのトランプに将棋。将棋といつても、回り将棋や、将棋崩しだ。宗矢が起き、三時のおやつを食べてしばらくして皆のシャワーが終わると、私の任務も終わり、無事解放される。

翌週の土曜日はもう十月に入つて居た。保育園で実歩のクラスだけ行事があるというところで、娘は我が家に荷物を下ろし、寛大と宗矢を置いて保育園に向かつた。家の中では寛大はまずブロックの袋を持つて来て居間で広げる。宗矢は「うん」と言つて二階の方を指さすので、娘の部屋に入つてラジカセでCDを聴いたり、掃除機を動かしたり。そのうち寛大もやつてきて、チョロQや電車、ウルトラマンや怪獣を出して一緒に遊んだ。娘と実歩が帰つてきてからは、近くのバツタの公園に出かけたが、暴れ蚊に襲われ、這う這うの体で帰つて来た。昼食後、娘は寛大を連れ歯科へ、その間、宗矢を寝せた後、実歩と将棋で遊んだ。

トリケラトプスの色塗りがようやくできたのは、次の週の土曜日。色を塗ると、迫力満点。そしてその次の週にニス塗りを完成。深緑色の太い脚は今にも動き出しそう。私が作つたお婆さんは、我が家の玄関の下駄箱の上で微笑んでいる。

30代フリーター やあ、ジイさん。米中両外相がニューヨークで会談し、台湾をめぐる主張をぶつけ合う一方、対話を継続する方針で一致した、と報じられている（9月25日朝日新聞朝刊）。双方が一步も譲らない姿勢を自国民向けにアピールし、流血の事態は避けるという共通の利害を確認したということか。

年金生活者 アメリカと中国はともに21世紀の2大「帝国」と呼ぶことができる。前者が基軸通貨という圧倒的な武器を手にする「世界帝国」であるのに対し、後者はまだ「地域帝国」とどまっているが、この先その力は増大するというのが大方の見方だ。

米中両「帝国」の対立を「無血の戦争」と見るなら、それはかつて米ソ両「帝国」が「服属国」を率いて争った東西冷戦と似ている。この戦争では、自国民および「服属国」の国民の支持をより多く勝ち得たアメリカが勝利し、より少なくしか支持を得られなかったソ連は解体した。国民の多数の

支持を得たのは自由な市場であり、統制された市場ではなかった。

米中の「無血の戦争」は自由な市場か統制された市場かをめぐる戦いではない。両国はともに自由な市場を基盤とする資本主義システムをとっている。中国がソ連のようにあつげなく倒れることはあり得ない。戦争のゆくえは見通しがたいということだ。

30代 「新冷戦」と呼ぶと判断を誤るかもしれない。

年金 東西冷戦と似ている点をあげる。とすれば、「無血の戦争」がこの先も続くだろうということだ。「帝国」と「服属国」あるいはその他の非「帝国」との対立は、ロシアとウクライナ、アメリカとアフガニスタン、イラクの関係のように「流血の戦争」に転化するが、「帝国」どうしの対立は「無血の戦争」として戦われる。核の存在がそれを強いるからだ。ウクライナを侵略したロシアに対しアメリカがはなから武力行使を放棄していることがそれを語っている。

30代 ソ連「帝国」が崩壊したとき、その「服属国」の多くは直前まで敵対した「帝国」の「服属国」になる道を選んだ。ドミノ倒しのようにNATOに加盟した。

年金 「帝国」としての復活・発展をはかるロシアにとって、それは自国を「帝国」として成り立たせていたつかえ棒を次々と失うことを意味した。そればかりか、多くの手駒を敵方に持たせることもあった。隣のウクライナまでNATO加盟を望んだのを見て、プーチンは脅えた。「帝国」の復活・発展どころか、衰えながらも残っている「帝国」の維持すら危うくなると考えたに違いない。

それはプーチンにとって、国家の統治そのものの危機、自らの独裁の危機を意味した。ウクライナ侵略はその危機を突破する手段として選ばれた。もし彼が自国を他国と対等な「主権国家」と考えていたら、あり得ない選択だった。だが、彼は自国を他国より高い地位にある「帝国」と考えていた。

世界を対等な「主権国家」群から成るシステムと考える近代西欧の理念に照らせば明らかな国際法違反も、「帝国」にとつては視野の外にしかない。

30代 「帝国」の経営は無理を重ねないといけないようだ。

年金 領域内に文化や制度の異なるさまざまな勢力を抱える「帝国」はそれらを束ねるのに苦労する。そのために宗教を必要とした。諸勢力の宗教を超える普遍性を備えた宗教を国教として国家の一体性を維持した。

古代ローマ帝国はカトリックを、中華帝国は儒教を、ロシア帝国はロシア正教を、オスマン帝国はイスラム教を、神聖ローマ帝国はカトリックをそれぞれ国家存立の支えとした。

17世紀ヨーロッパのウエストフアリア条約が「帝国」を衰退させ、「主権国家」を中心とした世界システムを築いたのは、「帝国」の宗教が世界秩序を混乱させる大もとなつてしまったからだ。

カトリックとプロテスタントの争い

ニュース日記 848  
中村 礼治

## 「帝国」の攻防

を中心とする30年戦争を終結させたこの条約は、カトリックを国教とする神聖ローマ帝国を事実上の解体に追いやることによつて、新旧キリスト教の国家規模での宗教対立を終わらせた。それは国家が国教を持つ時代の終わりの始まりだった。「帝国」のような広大な領域を持たない「主権国家」

は、内に抱える勢力が「帝国」にくらべてはるかに少ない。それを束ねるための国教を必要とする度合いは小さい。やがて市民革命を経て「国民国家」に発展していくと、平等な権利を有する「国民」の同質性が国家の一体性を保つ理念となつた。ここではキリスト教の神に代わつて「国民」が神となり、国家自らが宗教となつた。信教の自由、政教分離はその最大の教義にほかならない。

30代 国教を取り替えた「帝国」もある。帝政ロシアはロシア正教を共産主義に据え替えてソ連になり、崩壊後ふたたびロシア正教にもどした。中国は共産党が政権を握ったとき儒教から共産主義に国教をかえ、のちに儒教を限定的に復活させた。

年金 儒教の復活は「改革開放」のイデオロギー版だ。最後まで統制経済とマルクス主義を固守した結果、一挙に崩壊したソ連とは対照的と言つていい。変わらないのは依然として「帝国」であろうとする意志だ。